

約二五〇〇年前の二月十五日に、お釈迦様はインドのクシナガラクシナガラの町はずれにあった沙羅さら双樹そうじゆのもとで八十歳のご生涯を閉じられました。涅槃会とは、その時の様子を描いた涅槃図ねはんずという掛軸をかけて、お釈迦様のご遺徳しのをお偲おんがびする法要をいいます。

そこから、「涅槃」というのはつまり死ぬことである、と思われる方も多いことでしょう。確かにお釈迦様の命が終わり、その事を指した言葉ではあるのですが、その物言わぬ安らかなお姿から、「完全に迷いを離れた」「本当に仏様になった」という意味にも理解される様になりました。

私達は生きている限り、生きようとする体の働きに突き動かされています。そこから心の中に様々な欲求が湧いて来ます。その中には、生きるためだけで無い欲望も出て来るのです。これを一般には「煩悩」というのです。放っておくとこれは限りなく増えてしまいます。この増える「煩悩」を減らして制御しながら生きてゆく方法を、お釈迦様は示されました。

お釈迦様の「涅槃」は、生きるものにとっては生涯最後の教えを示したお姿でもあります。涅槃図の下の方には、鳥や虫、獣などの生きとし生ける、あらゆる命あるものが描かれています。お釈迦様の教え、仏教は修行者が悟りを求める道を説くことから始まりましたが、その普遍的な教えは修行者だけでなく、命あるもの全てに共通する教えとして広まってゆきました。

道元禅師が著した『正法眼蔵』からお言葉を抜粋して、曹洞宗の宗典としたのが『修しゆ証しやう義ぎ』  
です。

その初めに・・・「但生死しやうじ即ち涅槃と心得て、生死しやうじとして厭いとうべきもなく、涅槃として欣ねごうべきもなし」との一節があります。生まれてから死ぬまでの生涯はお悟りを求める修行の道に他ならず、その道こそ、迷いを離れた涅槃に至るのであって生きることを苦しみいやとして厭いとがったり、最後の涅槃ばかりに憧れの気持ちを持ってはならないという、戒めのお示しでもあります。

## 『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

---

人生は結果ではありません。<sup>はらんぼんじょう</sup>波瀾万丈の生涯よりも、波風の立たない人生を望む方は多いでしょう。しかし、思い通りにならないのが人生。与えられた命を懸命に生きているのが偽らざる私たちの生き様です。自分の命に嘘はつけないのです。

だからこそ、自身の健康も大切です。体をいたわって長く生きたいものです。沢山の方とご縁を結び、気持ちを通わせ合いたいものです。お蔭様の感謝の気持ちで人生を終えたいと思うのが自然ではないでしょうか。

涅槃会にあたり、生きるための教えで人々を救われたお釈迦様<sup>しの</sup>をお思いし、遺された教えを拠り所として今生かされている自分自身を省みるご縁としたいものです。

— 終 —